

ドラッカー理論から学んだ大学教育

—「公衆栄養学」を担当しての教育効果—

岩 田 弘 敏

1. はじめに

最近、経営学の父、ドラッカーの著書、「マネジメント 基本と原則」(エッセンシャル版)¹⁾がよく読まれている。週刊ダイヤモンドの誌上講義で斎藤孝明治大学教授²⁾はこの「マネジメント」から教育に役立つドラッカー9カ条を開陳している。そのような背景から最近、著者が担当している管理栄養士養成課程での「公衆栄養学」を中心に大学教育のあり方を考究してみたい。

大学教育には半世紀以上従事してきたが、「大学教育とは」が、未だに何たるものかわからない。J. S. ミル著(竹内一誠訳)、「大学教育について」³⁾に、次のようなことが記述してあった。まず、「教育とは人格の完成に自分自身を少しでも近づけるという特定の目的に向かって自ら努力し、また他の人々からもそのための援助を受けること」のようである。それに関連して、「大学は職業教育の場ではなく、有能で教養ある人間を育成する場であって、熟練した職業人の養成は専門学校で行うべき」とある。

著者は本学に管理栄養士養成課程が新設されたのを契機に、管理栄養士を養成するために奉職することになったが、健康福祉学部の総合福祉学科と食健康栄養学科の1年生(前期)を対象に「健康福祉概論」2単位、食健康栄養学科1年生後期に「医学概論」2単位と「環境と疾病」2単位、食健康栄養学科3年生前期に「公衆栄養学」2単位、同学年後期に「公衆栄養マネジメント論」2単位が加わり、計5科目を担当している。この5科目のうち、「公衆栄養マネジメント論」を除けば、いずれも本学では必須科目の区分になる。

健康福祉学部共通の必須科目と位置づけられている「健康福祉概論」を健康福祉学部長の責務として担当している。福祉を専門とする総合福祉学科の学生には著者の福祉の講義では物足りないかもしれないが、社会福祉に保健学(公衆衛生学)を重層させて講義しているので、福祉の専門科目では聴講できない内容になっている。一方、食健康栄養学科の学生には公衆衛生学の科目以外、福祉を学ぶ機会がほとんどない。2001年、厚生労働省による新カリキュラムの専門基礎分野の一つ、「社会・環境と健康」の国家試験準備学習に関わっていると、福祉は軽視できない科目と位置づけられる。

「医学概論」は新カリキュラムの専門基礎分野の、「人体の構造と機能、疾病の成り立ち」、「環境と疾病」は「社会・環境と健康」に関連する科目であり、他の科目でも触れられるであろうが、国試の過去問を慎重に吟味しながら講義している。

問題は急きょ追加された「公衆栄養学」の講義である。「公衆栄養学」は新カリキュラムの専門分野の一つ、「公衆栄養学」で、本学では「公衆栄養学」と「公衆栄養マネジメント論」とに分けて講義することになっている。著者自身は「公衆栄養学」は管理栄養士養成課程では公衆衛生学と並んで、社会的需要の大きい科目と認識して、「公衆栄養マネジメント論」を含めた「公衆栄養学」を中心に自己流の大学教育を展開してきた。著者にとっては長い教育歴の中では「公衆栄養学」の講義は初体験であるので、不備な点が多々あることは否めない。

2. 管理栄養士の基本的能力

2001年の「新カリキュラム」⁴⁾では、管理栄養士の基本的能力に対しての考え方として、次の5つのアウトカムが示されている。①管理栄養士が果たすべき多様な専門領域に関する基本となる能力を養うこと、②管理栄養士に必要とされる知識、技能、態度および考え方の総合的能力を養うこと、③チーム医療の重要性を理解し他職種や患者とのコミュニケーションを円滑に進める能力を養うこと、④公衆衛生を理解し、保健・医療・福祉・介護システムの中で、栄養・給食関連サービスのマネジメントを行うことができる能力を養うこと、⑤健康の保持増進、疾病の一次、二次、三次予防のための栄養指導を行う能力を養うこと、の5つである。「公衆栄養学」は管理栄養士としての上記の5つの能力のうち、少なくとも③、④、⑤とは密接に関係しているので、重要科目として学習させなくてはならないと考えている。なお、さきのミル³⁾のいう大学教育では①と②のアウトカムに該当するが、それには本学が設定している教養教育をしっかりと受講してもらわなくてはならない。

3. 公衆栄養学と著者

著者が厚生労働省あるいは文部科学省から公衆栄養学

担当者として適任と認可された理由がよくわからない。著者の学歴・職歴では、国立公衆衛生院（現在の国立保健医療科学院）の1年間の正規過程医学科を修了しているので、「公衆衛生学」の科目は専門家として担当できるはずであり、事実、岐阜大学医学部でも和歌山県立医科大学でも公衆衛生学を担当してきた。しかし、公衆栄養学の科目は担当したこともなく、内容的に公衆衛生とは、異なるように感じている。確かに公衆栄養学は公衆衛生学の一環であるといわれている。しかし、公衆栄養学の教科書を眺めると、食事バランスガイド、食料需給表、食事摂取基準など、著者には、あまりなじみのない用語が目立ち、公衆衛生学とはかなり異なる科目と感じていた。この科目には将来は、実務的に経験豊富な管理栄養士である教授または准教授によって講義されるべきものであろう。

著者は公衆衛生学を専門としてきたためか、健康日本21の「(岐阜県版)ヘルスプランぎふ21」作成推進委員会の発足(平成12年)当初から、その委員(委員長)を務めている。また、平成5年以降、岐阜県医療審議会会長を拝命してきた関係で、県内の医学に関して比較的難解な課題解決を迫られる委員会が設置されるたびごとにその委員長に当(あて)職として任命されることが多く、近年では、がん診療連携拠点病院支援委員会とがん対策推進協議会があり、両者の発足当初から「がん」は専門ではないのに委員(委員長、会長)を任じられてきている。食と農の連携強化地域推進協議会にも名を連ねていたことがある。有志の団体、「岐阜一食を考えるみんなの会」も発足して20年以上経過しているが、その会長も務めてきている。平成10年10月、第57回日本公衆衛生学会総会学会長として、「これからの公衆衛生のサイエンスとアート」⁵⁾のテーマ(テーマとして設定はしなかったが、学会長講演の演題名を便宜的に使用している)で、岐阜市において開催し、講演、シンポジウムなどを企画して、未来の公衆衛生のあるべき姿を各演者に論じていただいた。その一つにこれからの「公衆衛生の評価」のシンポジウムが生まれ、その中で岡山大の川田智恵子教授から、「ヘルスプロモーションの評価」について報告していただいた。学術的には岐阜大学時代、衛生学教室に数人の食関係の研究生を受け入れ、公衆栄養学的研究に従事してもらい、彼女らを指導してきた。これらを総合して、公衆栄養学の授業担当が許可されたのであろうか。いずれにしろ、現在もお手探りで学生とともに学習している段階である。

著者の最大の欠点は平成13年9月(岐阜大学停年1年半後)、脳塞栓で倒れ、その既往があるためか、声が

出しにくいことと右手がうまく使えないことである。声のほうはマイクを使用して事なきを得ているが、黒板に字が書けない。書けても読める字が書けないハンデがある。読める字で板書できないので、やむを得ず、すべてパワーポイントとそれと同じ資料を作成して、学生に配布し講義している。

4. 大学は「時間の管理者」

久恒⁶⁾は、彼の著書の中で、「ドラッカーは時間管理を強調していて、時間をより有効に使う方法として①時間の使い方を記録する、②時間の使い方を分析する、③時間をまとめるの3点をあげている」と述べている。斎藤²⁾もドラッカー9カ条に「時間は資源である」ことを第1条にあげている。どの大学も従来から時間管理の基本である年間スケジュールを組んでいる。本学でも年度ごとに、年間行事、授業予定が組まれている⁷⁾。まず、4月の初旬に入学式、学生ガイダンス、授業開始に先立ち、受講調整期間があり、1年次の授業が開始される。1時間は45分、授業時間割り上、1時限は2時間(90分)としている。半期15回の授業をもって2単位としている。卒業に必要な修業単位数は各学科とも必須科目を含めて124単位で、4年以上(近年では3年以上になる可能性が大である)在学して所定の単位を修得すれば卒業できることになっている。

新入生が入学当初、戸惑うのはクラス担任がいないこと、ホームルームの時間がないこと、1時限が90分であること、のようである。特に授業時間の問題で、高校までの1時間は最近では50分として組まれているが、大学では1時限が2時間(90分)となっていることに戸惑いと負担を感じているようである。90分間には最低5回は商業的話を挿入しなくては、学生はじっと座っておれないようである。その間、教員側は、人によっては、たとえ話ないしは雑談を入れるという工夫をして学生を眠らせないように、退屈させないようにしており、また、別の人は、質問をしたり、テキストを読ませたり、さまざまな工夫を凝らしているようであるが、著者はパワーポイントでの授業なので、ところどころに図表を入れたり、写真を入れたりする程度の工夫しかしていない。半期15回であるが、かつて数か所の市立大学の非常勤講師をしていたころ、おおた、13回ぐらいで2単位を与えていた。授業回数の約3分の1の4回まで休んでよいと宣言していたものである。ところが、最近は必ず15回は講義しなくてはならない。3分の1である5回までの欠席は認められるが、やむをえない理由で休むのは仕方ないが、半期前半に5回近く休ま

れると教員のほうが気をもむことになる。1回目、2回目を休むと受講意欲が低下するし、授業についていかないかどうかの事態になる。ともあれ学習意欲そのものが低下することが危険である。また、交通機関がマヒして登校できないこともある。大型台風が上陸して登校できなくなったり、大雪で登校できなくなったりする。全学生に絡む場合は全学休講となるが、ある特定の市町村からの通学では事情によって当人だけが欠席せざるを得ないことになる。そのとき、すでに5回休んでいたら受講資格を失ってしまう。著者は本学にきてから、こんな事態に再三遭遇している。結果的にはその学生は休学か退学しているが、それが未だ明確でない段階のときは、教員側に精神的な負担となる。遅刻、早引きはあまり認めたくないが、やむをえない場合は配慮することになっている。大学は時間には厳格であるべきと反省している。自分自身では授業時間に遅刻しないように努めている。むしろ始業前に教室に入るようにしている。ドラッカーも指摘しているように、時間は無駄にしたくない。時間は厳守したほうが気分がよい。予定より早く終了することはあるが、遅く始めたことはない。

5. 大学、学科の学習目標

東海学院大学には、建学の精神がある⁸⁾。「国際的視野を備えた創造性と行動力豊かな教養人の育成」で、この精神のもとに、大学での学習目標が設定されている。健康福祉学部は、総合福祉学科と食健康栄養学科の2学科から構成されており、「21世紀の日本が少子高齢社会を迎えるにあたって、人々が健康で安全かつ安心して元気にのびのびと生活していくことができるように、福祉と食を中心とした健康に着目して」設置されている。この学部では、21世紀の保健と福祉の将来の方向と問題を考えるために、先にも述べたように、1年次の共通科目として「健康福祉概論」が必須となっている。著者はこの健康福祉概論を担当し、それには準備に相当時間をかけている。ここで学んだことを基礎に、総合福祉学科、食健康栄養学科、それぞれが「21世紀の社会を担うべく、すべての人、特に高齢者、児童、障害者などにとって暮らしやすい社会を実現するための『福祉と食の分野での専門的な知識』を学ぶこと」になっている。そして、選択科目においては両学科とも教養科目が取れるように設定され、21世紀の福祉と食を含めた健康について多面的に学び、豊かな行動力を備えた福祉、介護、保健、栄養などの領域において総合的に活躍できる人材の育成が果たせるようなカリキュラムとなっている。食健康栄養学科、なかんずく管理栄養士の学習目標は、先

にもふれた5つのアウトカムをめざすことである。「公衆栄養学」の学習目標と現実のレベルとのギャップはあまりに大きく、特に現実のレベルの下限のレベルがまちまちの中で、学習目標に向けて上げるようなシラバスを編成しているが、かなり工夫を重ねている。入学者自体のレベルを入学試験で一定（下限）以上にすることが先決かもしれないが。

ドラッカーは4,50年前に、資本主義社会の次には情報社会ではなく、情報を集め体系化した知識社会が到来すると予言している⁶⁾。それを担う人材は両義的な人間というのである。つまり、地域社会に根ざし、地域文化にも造詣を深め、一方でグローバルな視野やビジョンを持っている人間を養成していくようにと提言している。現在、環境保全などでよく言われている“think globally, act locally”⁹⁾が実践できる対極的な視点や能力を併せ持った人間のことである。これは本学の建学の精神とも一致しているので、本学の創設者もドラッカーの発想の先見性のある人であったと敬意を表したい。

6. 顧客の創造

大学教育の場合、ドラッカー論でいう顧客はだれであろうか。齊藤²⁾は授業の後、感動しているか満足しているかの学生と親（保護者）といている。大学では、まず、学生であることは述べるまでもない。それに、保護者も顧客となろう。さらに、学生が卒業して就労すれば、管理栄養士としては保健、医療、福祉、介護、栄養・給食関連サービス業、入院患者など、いずれも顧客となるであろう。学生を取り巻くすべての人が顧客となるかもしれない。これだけ広範囲の人たちが顧客となれば、その顧客のためには、有能で教養のある人間の養成が必要なので、公衆衛生学のみならず、教養教育の充実と公衆栄養学も重要科目として学習してもらわなくてはならない。それゆえに、すべての学生が理解しやすいように講義をしていかななくてはならない。

講義は一方通行になりがちなので、少人数教育が推奨されている。可能ならば、6～7人のスモールグループ学習で、すべての学生が自己表現できるように、KJ法（川喜田二郎の発想法）を取り入れ、学生相互にディスカッションして課題解決すべきとの教育法が理想であるとの教育を受けたことがある。このグループワークの中では交代制で務めるリーダーの役割はきわめて大きい。リーダーになると時間管理、意見収集、まとめなどをする役割がある。発表は科目ごとに、単位時間ごとに交代しながら発表者となり、記録者も同様に交代制で務める。

この手法は、平成2年12月2日から7日までの1週

間、当時の厚生省、文部省主催、日本医学教育学会・財団法人医学教育振興財団協力、WHO 後援の第 17 回「医学教育者のためのワークショップ」¹⁰⁾ で研修を受けて得たものである。実は、そこで得たことは次のようなことであった。すなわち、カリキュラムとはなにか、教育には目標が大切で、目標さえしっかりしておけば、おのずと方法も評価も可能となるとのこと。1 週間で 10 課題以上の目標設定、方法（方略）、評価についてグループワークをした充実した研修であった。著者の教育の原点はこの研修にある。その後、岐阜大学医学部のカリキュラム改革に取り組んだ。現在のチュートリアル教育の原型^{11、12)} である。ワークショップから帰岐した翌年度から医学部教務厚生委員長、後半年は併任カリキュラム改革委員長、引き続き 6 年間、カリキュラム改革委員長を務めた。講座制の強い医学部での教育改革は実に困難で長い道のりであった。

高校生は教員が板書したものを写すことをもって受講していると受け止めているようである。確かに視覚、聴覚それにペンを持って書くという触覚とで記憶力が高まるという説もある。4 年前、本学で講義を始めたころは出席カードの裏面に感想を自由に書かせていたが、それには「板書を何故しないのか」、「板書こそ授業」と思い込んでいる学生が多いのに驚いた。高校での教育は板書優先のようである。あるいは塾での教育のせいかもしれない。著者は、先にも述べたごとく、自ら罹患した病気のこと、後遺症で字が書きにくいことを説明しているが、板書を免除してくれない。苦肉の策として、講義内容をすべてパワーポイントに入れ、それにレーザーポインターで指しながら説明していたが、レーザーポインターでは学生は目が追えないとの苦情から、今では指し棒で字面を追って説明している。それに、パワーポイントとそっくり同じ手持ち資料を学生に渡しており、講義時には重要箇所にはパワーポイントのスライドに赤字を入れて強調しているので、学生にはノートをとる代わりに資料に赤線だけを入れればよいと伝えてある。しかし、ノートを取るからこそ、受講と思っている学生にはこれでは物足りなく、板書を要求してくる。一方では赤線さえつけない学生もいる。教室で何を期待して受講しているのかわからない現状もある。

7. 公衆栄養学の教育目標

公衆栄養学の科目の教育目標を定めるに当たり、まず管理栄養士とは何か、保護者や卒後の職場ではどのような管理栄養士を期待しているのだろうか、を知る必要があるが、それについては先の 5 つの能力を涵養すること

であろう。その中での公衆栄養学との関係を検討しなくてはならない。公衆栄養学について管理栄養士の国家試験の過去問を調べる¹³⁾ と、次のような項目があげられる。①公衆栄養学の概念、②公衆栄養アセスメント、③公衆栄養プログラム計画、④公衆栄養プログラムの目標設定、⑤公衆栄養プログラムの実施、⑥公衆栄養プログラムの評価、⑦栄養疫学、⑧わが国の健康・栄養問題の現状と課題、⑨わが国の栄養政策、⑩食事摂取基準、⑪諸外国の健康・栄養問題の現状と課題、および健康・栄養政策である。うち⑨の中には食育基本法、健康増進法、栄養士法、国民健康・栄養調査、健康日本 21 などが含まれている。⑨のわが国の栄養政策を 4 分割すると計 15 項目となる。

本学で公衆栄養学実習を担当していた加藤幸代特任講師（管理栄養士）（平成 23 年度で退職）がまとめた、ここ数年の管理栄養士国家試験出題傾向調べ¹⁴⁾ を拝見すると、①公衆栄養学の概念・ヘルスプロモーション、2 回、②地域公衆栄養活動・住民参加、2 回、③公衆栄養プログラム計画策定・マネジメント、5 回、④新健康フロンティア戦略の目標、2 回、⑤特定健康診査・特定保健指導、2 回、⑥食生活の変遷（歴史）明治～昭和、1 回、⑦高齢者の問題・介護・健康づくり、2 回、⑧食料需給表、食料受給率、3 回、⑨世界の健康・栄養、4 回、⑩国民健康・栄養調査、4 回、⑪栄養士法、2 回、⑫健康増進法、2 回、⑬食育基本法、2 回、⑭食事バランスガイド、1 回、⑮公衆栄養施策、1 回、⑯日本人の食事摂取基準（2010 年版）、6 回、⑰食事改善、3 回、⑱食事調査、2 回となっている。なかでも③と⑯、それに、⑨、⑩の出題傾向が高いようである。

本学でテキストとして使用している「新公衆栄養学」（第一出版）¹⁵⁾ の目次から主な項目を抽出すると、①序説（公衆栄養学の概念、歴史）、②わが国の健康・栄養、③国民栄養の現状と課題、④食習慣と健康・疾病（栄養疫学が含まれる）、⑤わが国の健康・栄養政策（食生活指針、食事バランスガイド、食料需給表など）、⑥食事摂取基準、⑦公衆栄養マネジメント、⑧諸外国の健康・栄養・食料問題、⑨公衆栄養関係法規（健康増進法や食育基本法など）と公衆栄養行政である。

著者がときどき引用するテキスト、「ウェルネス公衆栄養学」（医歯薬出版）¹⁶⁾ では、①公衆栄養学の概念、②公衆栄養活動の進め方（マネジメント）、③栄養疫学、④公衆栄養の現状と問題点、⑤公衆栄養と栄養行政、⑥食事摂取基準、⑦公衆栄養プログラムの実際、⑧世界の健康・栄養問題の現状と政策である。

管理栄養士受験講座「公衆栄養学」（第一出版）¹⁷⁾ では、

①公衆栄養学概念、②公衆栄養マネジメント、③公衆栄養アセスメント、④公衆栄養プログラム計画、⑤公衆栄養プログラムの目標設定、⑥公衆栄養プログラムの実施、⑦公衆栄養プログラムの評価、⑧栄養疫学、⑨わが国の健康・栄養問題の現状と課題、⑩わが国の栄養政策、⑪食事摂取基準、⑫諸外国の健康・栄養問題の現状と課題、および健康栄養政策、参考資料に食育基本法、国民健康・栄養調査、食事摂取基準、食生活指針などとなっている。

最近、発刊された管理栄養士養成課程「栄養管理と生命科学シリーズ」の「公衆栄養の科学」(理工図書)¹⁸⁾では、①公衆栄養学概念、②健康・栄養問題の現状と課題、③健康・栄養政策、④食事摂取基準、⑤栄養疫学、⑥公衆栄養マネジメント、⑦公衆栄養アセスメント、⑧公衆栄養プログラムの目標設定、⑨公衆栄養プログラムの計画、⑩公衆栄養プログラムの実施、⑪公衆栄養プログラムの評価、⑫公衆栄養プログラムの展開、⑬公衆栄養関係法規などとなっている。

直近に発刊された図書以外の前3図書を参考にしながら、公衆栄養マネジメント論は後期に行うが、これらも若干含めながら、公衆栄養学のシラバスを作ってみると¹⁹⁾、

「地域や職域等における保健、医療、福祉、介護等の情報収集や実態把握によって、あらゆる健康・栄養状態の者に対して、適切に栄養関連のサービスを提供するプログラムを作成し、計画、実施、評価の総合的マネジメントに必要な理論と方法を修得し、社会資源の活用等が図れるように学ぶ。15回のシラバスは、

① 公衆栄養学概念、②栄養学士としての健康増進法、食育基本法等の意義と内容の理解、③現代社会の健康、疾病、栄養問題、④食環境のとりえ方と食環境づくりとヘルスプロモーション、⑤公衆栄養活動と保健、医療、福祉、介護システム、⑥国民健康・栄養調査、⑦栄養疫学、⑧疾病の発症要因と生活習慣病との関係、⑨食生活指針、⑩食事バランスガイド、⑪健康づくりのための運動・休養、⑫諸外国の健康、栄養、食料問題、⑬健康増進法、食育基本法以外の法規と公衆栄養行政、⑭諸外国の管理栄養士・栄養士の養成制度、⑮公衆栄養学概念と栄養士の関係」としている。

以上は、公衆栄養学開講2年目のシラバスであるが、初年度のものからはかなり修正してある。来年も修正するつもりである。

昭和60年前後の数年間、岐阜県立衛生専門学校で校長をしていたことがある。あるとき、看護教務主任から学生の書いた看護計画を校長として添削を頼まれたことがある。学生の書いた計画書は学生が主語であったので、「理解させる」、「実験させる」、「行動ができるよう

に指示する」など、教員側に立った表現に変更したところ、教務主任に強く注意を受けた記憶がある。看護教育は学生が主体なので、学生を主語にして計画書を作らせることになっているとのこと。先の「医学教育者のためのワークショップ」でも、かなり以前から、学生を主語にして教育目標を企画するように指導していたようであるが、当時は、まだ著者自身無知で、医学教育はそこまで進歩していないと思っていた。看護教育は医学教育よりかなり進んでいると実感したものである。教育は学生が顧客で、誰よりも優先されなくてはならないのである。

8. 顧客の創造にはマーケティングとイノベーション^{1), 6)}

1) マーケティング

まず、マーケティングを考えると、学生をはじめ、顧客のニーズを把握しなくてはならない。学生に迎合するわけではないが、学生には学習しようとする意欲をもってもらいたい。それには学生は何を期待しているのだろうか。学生に調査をしたことはないが、先にも述べた出席カードの裏面に、平成20年度、1年間だけだが、毎回、感想を書いてもらっていた。あまり参考になることはなかったもので、次年度から感想を止めて、一口質問に変更している。当時、感想には、「眠かったので、つぎには頑張る」がときどき書かれていた。寝ていることは自覚しているようである。私は既往のことを説明して板書ができないことを再三詫言っているのだが、理解してくれずに板書要求が多かった。「板書をもっとしてほしい」、板書をする「板書の字が読めない」、「読める字を板書してほしい」が多かった。「周りがやかましいので注意してほしい」、「講義が早すぎる、もっとゆっくり話してほしい」、「内容が難しすぎる、わかりやすく話してほしい」などは挙手して訴えてほしいものである。もっとひどいのは「何を話しているのかわからない」で、これでは席に就いているのが苦痛だったのではなかろうか。「照明が暗い」、「冷房がききすぎる」、などの顕在的ニーズは教務部の担当者と相談したり、相互に話合って解決してほしい。もっと丁寧に調査すべきであるが、これらにすべて迎合できないし、自分たちで解決できることも多かる。勿論、著者自身が反省して修正すべきは修正するつもりである。例えば、板書はできないので、パワーポイントで勘弁してもらうこと、同一の資料をプリントして配布すること、平易に話すことなどは実行したい。

顧客、つまり学生による授業アンケートが本学FD教育センターから平成20年度来、科目ごと授業終了時に取られている。著者の担当した2年目の「公衆栄養学」

のアンケート結果から改良すべき点を把握して、次年度以降に生かしたいと考えた。5段階評価（1はよくない、・・・4はややよい、5はよい）で、4、5を併せた「よい」評価で60%以上であったのは、「シラバスに沿っていた」のみで、50%以上（学生の半数以上）は、「授業内容が難しかった」、「情報提供は適切であった」、「プリント等に内容理解への配慮があった」、「教員の熱意は感じた」であった。「悪い」評価では、「予習、復習などに費やす時間が30分以内」が61.1%で最も高く、「質問、意見を述べる配慮がない」が33.1%、「教員の話が聞き取れなかった」が22.2%であった。自己申告の欠席や遅刻回数は少なかった。このアンケートにどれだけの信憑性があるかどうか疑問である。3ばかりに○をつけているもの、5ばかりに○をつけているものなど偏りが見受けられた。授業内容が難しいのには授業を改善しなくてはならない。質問の時間を持つべきとの指摘にも応じなくてはならないと反省している。いままで、手を挙げて誰も質問していないのだが。マイクの使い方も工夫をしなくては聴講する学生に申し訳ない。私語にも注意をしなくてはいけないのであろう。字が書けないハンデがあるので、本学が取り入れているポートフォリオシステムは非常に価値あるシステムとは思いますが、書式にワープロで記入できるようにしていただけない限り応ずることができない。先の平成23年度GP学内フォーラムでの藤本元啓金沢工業大学教授のいうKIT（金沢工業大学）ポートフォリオシステム²⁰⁾は見事だと感じた。その講演で述べられたP（つくる）、D（行動・記録する）、C（気づく）、A（変える）の学習支援のスパイダル改善は恒常的にしていかななくてはいけないであろう。

2) イノベーション

次に、発展的講義を工夫するイノベーションが必要である。医学部時代には簡単な板書で済ませてきたし、せいぜいOHPで説明する程度の講義をしてきたが、本学では、学生にパワーポイントで講義しているので、著者にとってはかなりのイノベーションである。しかもスライドと同じ資料を印刷（食健康栄養学科の教員、すなわち、助手にお願いしている）して配布し、それとカラフルな画像を見せているわけであるから理解しやすいのではないかと想像している。レーザーポインターでは医師会等での講習会などではポイントを目で追ってくれているが、学生はまったく目を動かさない。差し棒で字を指せばやっとスクリーンを見てくれる程度である。著者はパワーポイント作成に今、相当時間を費やしている。文字数を少なくして、図、表などテキストからスキャンしてわかりやすいように工夫しているが、はたして学生には

どのように映っているのだろうか。まだまだ満足してもらえていないようである。

9. 評価

公衆栄養学の講義第1回目（初回）に、管理栄養士国家試験の過去の問題集から1問（箱問）につき4～5肢の設問があるが、そのうち、正誤どちらかの1つの肢を20問抽出し、それを学生に提示し、これに○か×かを付けてもらい、×なら正解は何かを記述してもらう形式の設問を、あらかじめ配布している。最終講義（15回か16回）の終了後、その20問中12問は同一問題、他の8問は新規に、しかも類似の問題を作成したもので評価を行い、既存の12問ができれば60点が間違いなく獲得できるようにしている。このように合格間違なしの親切的試験方法をとっている。解答はその都度、講義中に行っているので、なお不明であれば、グループごとに勉強会等で正解を求め合うように指示してある。最初に手にした20問は学生にとっては初めての用語であるはずだから、講義ごとにその用語がテキストやプリントの何処に出てくるのか探り、その言葉の前後で、正解はどれかを学習すれば記憶に残るであろうとの配慮で、この形式の評価をしてきた。○、×での正解率では辛うじて合格点に達してくれるが、×の場合、誤りを正してもらうと間違いが多く、設問を正しく理解していないことが明らかである。一問の中から選択肢を抽出することがだめなら、10問の箱問、それぞれ4～5の選択肢、計約40～50肢から正解か誤りかを解答させるべきかもしれない。むしろそのほうが誤りを正す学習になりそうである。次年度からは、その方法を採用するつもりである。4年生対象の国家試験模擬テストで誤りの項目、肢に対して、正解になるよう訂正したレポートを提出させているが、それを拝見すると、誤りを的確に指摘し、訂正している学生は今回の模擬テストで高得点を出しているようである。そればかりか管理栄養士の国家試験に合格しているので、このような評価法を勧めたい。いずれにしろ、受講態度が悪いこと、裏返せば講義の仕方が悪いのかもしれないという反省もある。判らないとき、グループでディスカッションができていないようである。リーダーを指名して全員で討論することができないようである。烏合の衆的ディスカッションなので、時間ばかりかかって何もまとまらない。受験勉強ではないので、相互に切磋琢磨して知識を高め合う態度を取ってほしい。著者が「医学教育者のためのワークショップ」で受けてきたようなグループワークのトレーニングから始めるべきと考えているが、岐阜大学医学部の学生は今ほど

うなっているかよくわからないが、当初は10人（教室数の関係でグループの人数が多くなっている）の学生が、リーダー、記録係、レポーターの3役を決めて、参考図書を片手に、パソコンの前に遅刻もせず車座になって課題について議論している姿を見ることができた。

著者の提案している評価法、試験は学生には満足のようであるが、著者側からみると、意図するように学生が学習してくれておらず残念である。やる気の出る講義を目指しているが、著者との年代差が大きく相互に理解しがたい点も多いのかもしれない。

10. まとめ

「公衆栄養学」を例にしてドラッカーのマネジメント論を参考に、著者の考えている大学教育について述べてきたが、この「公衆栄養学」だけでなく大学教育全般では、専門教育に終始するのではなく、人格の完成を目指す教養教育に力を入れるべきであろう。かつて大学には教養課程が1年半あるいは2年間あったが、今では4年間で教養科目を随時とるようなカリキュラムを編成することになってきた。学生には教養教育を軽視している傾向もあった。これでは人格形成はできない。専門科目と教養科目とを織り交ぜて、科目との相互関係を理解して体系化（カリキュラム・ツリー）していくことが人間の性格と能力形成に力を及ぼすのではなかろうか。「公衆栄養学」を通じて、「さまざまな科目で聞いているはずだが」と問いかけをしつつ講義をしているが、学生の目は他の科目との連携を理解しているように見られない。今後の課題である。

文献・図書

- 1) P. F. ドラッカー（上田惇生編訳）：マネジメント「エッセンシャル版」ダイヤモンド社 2010. 10. 29.
- 2) 斉藤 孝：先生にも読んで聞かせたい子どもを育てるための9か条 週刊ダイヤモンド6/18：52-53、2011.
- 3) J.S. ミル著（竹内一誠訳）：大学教育について 岩波書店 東京、2011. 7. 15.
- 4) 吉池信男：管理栄養士養成課程における教育の現状と課題、青森保健大雑誌 10（2）：37-240、2009.
- 5) 第57回日本公衆衛生学会総会実行委員会：第57回日本公衆衛生学会総会学会長講演、特別講演、シンポジウム記録集「これからの公衆衛生のサイエンスとアート」岐阜、平成11年2月
- 6) 久恒啓一：図解で身につく！ドラッカーの理論、中経出版 東京、2011. 5. 16.
- 7) 東海学院大学：平成20年度履修のてびき
- 8) 東海学院大学：自己点検・評価報告書 各務原市、2007
- 9) 藤城敏幸著：生活と環境 東京教学社 東京、2010. 4. 1.
- 10) 厚生省、文部省：第17回『医学教育者のためのワークショップ』の記録、協力：日本医学教育学会、財団法人医学教育振興財団、後援：WHO 富士教育研修所（静岡）、平成2年12月2日（日）～12月7日（金）
- 11) 岩田弘敏：新カリキュラム作成の苦しみとそのねらい 岐大ひろば 20：6-7、平成5年
- 12) 岩田弘敏：チュートリアル教育（私のたどった教育観の変遷）岐阜医学会館だより 第69号p2-6 平成15年5月
- 13) 管理栄養士国試対策研究会：2010管理栄養士国家試験過去問題解説集、中央出版、2009. 7. 10.
- 14) 加藤幸代氏から得たメモ。管理栄養士国家試験問題の過去数年の傾向、2011. 8. 1.
- 15) 藤澤良知、原 正俊編著：新公衆栄養学 第一出版 東京、2011. 4.
- 16) 沖増 哲、前大道教子、松原知子編集：ウエルネス公衆栄養学、医歯薬出版、2010. 3. 10. 東京
- 17) 全国栄養士養成施設協会、日本栄養士会、監修、管理栄養士国家試験教科研究会編：管理栄養士受験講座公衆栄養学、第一出版、2007. 7. 10. 東京
- 18) 大和田浩子、中山健夫編著：管理栄養士養成課程「栄養管理と生命科学シリーズ」公衆栄養の科学、理工図書、2012. 4. 17. 東京
- 19) 東海学院大学：平成20年度講義概要（シラバス）
- 20) 藤本元啓：ポートフォリオシステムの導入と活用、東海学院大学 GP フォーラム 2011. 8. 3. 講演要旨